

共同研究 ● マイノリティと音楽の複合的関係に関する人類学的研究 (2008-2011)

マイノリティの文化や歴史は彼らが居住する国家や地域の公的な文化表象や教育から排除されている場合が多い。マイノリティの人々は、文化的同化への圧力のなかで、自らの出自や文化を意図的に忘れようとするこゝもあれば、また逆に同化に抵抗することもある。いずれの場合も、排除の圧力や主流文化の存在に圧倒されて自信をなくしたり、自己の立ち位置を見失うなど、さまざまな精神的苦痛を味わうことになる。

このような状況に置かれるマイノリティの人びとが、音楽に表現や主張の場を求める事例が、これまでも数多く報告されている。彼らにとって他のメディアへのアクセスが制限されていることも理由の一つであろうが、この現象をそれだけで説明することはできない。マイノリティの人びとの音楽への関与は、かれらの自己イメージとどのような関係を持つのか。音楽のいかなる要素がかれらの音楽との関わりを可能にしているのか。マイノリティの音楽実践は、かれらの政治活動や社会運動とどのような関係を持つのか。本共同研究は、このようなマイノリティと音楽実践の関係について議論を深めることを目的として組織された。

先行研究の傾向

マイノリティの音楽に関する研究は、民族音楽学、人類学、社会学、パフォーマンス研究、文化研究など複数の分野で進められてきたが、学際的な共同研究は少なくとも日本では行われてこなかった。民族音楽学においては、少数民族の音楽が、その最初期から主要な研究対象であったが、主流文化において消滅もしくは弱体化した音楽の歴史

的な残滓として位置づけられることが多かった。このような研究は、マジョリティに帰属する研究者が、比較的短期間の調査に基づいて、音楽の楽理的構造・演奏形態・社会的機能など、古典的な調査項目について分析するものであった。その背景には、少数民族の音楽を、音楽の世界的な分布・伝播を解明するジグソーパズルの一片として、またすでに消滅した音楽を再構築するヒントとして位置づけるノスタルジックな進化論的視点が存在していたと言える。

上に述べたようなマジョリティ研究者の研究では、調査

する者とされる者の力関係は、おもに調査者の個人的な倫理の問題として扱われ、構造的な力の不均衡は不問にされた。1970年代以降、マジョリティ研究者の支配的な視線や搾取的な調査が問題視されるにつれ、研究対象となった集団から研究者が現れるようになった。北米の民族音楽学では、1980年代以降、アフリカ系、ヒスパニック系、アジア系などの研究者が、自らのマイノリティ体験を起点とした研究を活発化させているが、それと同時にマジョリティ研究者が批判を恐れてこの分野から撤退するという、マイノリティ音楽研究のゲッター化をも誘発している。

一方、社会学、人類学、文化研究を中心としたマイノリティ・移民・ディアスポラ研究においても、マイノリティの音楽実践が十分に検討されてきたとはいえない。音楽に関する言及は少なくないが、音楽の内容との関連からアイデンティティの問題を考察する研究は極めて珍しい。「音楽Aは集団Bの文化的アイデンティティの表出である」というような紋切り型の記述はさすがに少なくなったが、作り出される音響の詳細な検討や、音が生成する場としての

身体の問題(後述)などに踏み込んだ議論はほとんど行われていないように思われる。音楽の専門的な知識や経験がなければ研究が行えないわけではないが、音楽の特定の構成要素や演奏上の慣習がマイノリティの主体との接点になる場合があり、それを分析する能力を養うことはマイノリティと音楽の研究において不可欠であろう。

複合的関係

本研究を進める上で、関連する二つの点に留意してい

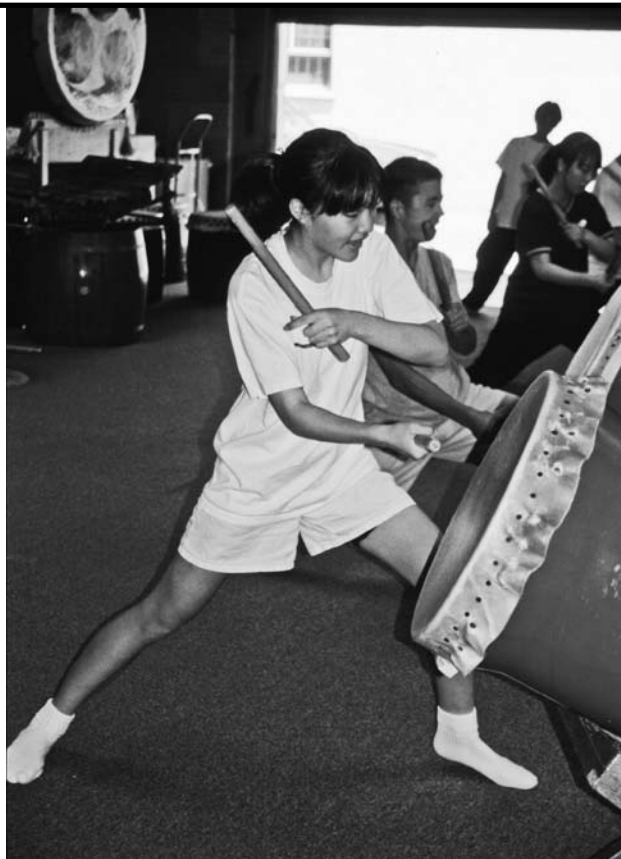
る。第一に、マイノリティは一元的に劣位におかれるのではなく、マイノリティ・マジョリティ関係を形成する複数の軸(民族、宗教、言語、階層、カースト、ジェンダー、セクシュアリティなど)が複合的・重層的に絡み合っている点である。そうであるとするならば、この複合性・重層性は音楽の実践にどのように発現するのだろうか。

一例をあげると、北米に住む日系女性のタイコ(和太鼓)音楽への深い関与は、主流白人文化に根強く存在する人種とジェンダーに関するステレオタイプへの抵抗であるだけ



フィリピン・ミンダナオ島の舞踊を学ぶフィリピン系アメリカ人。

でなく、日系社会で自明であるとしていた女性像に対する異議申し立てでもあった。しかし、それと同時に、タイコ演奏における構えや打ち方の基礎は男性が作ったものでもあり、「男らしさ」という意味づけが常にまわりついている。そのため、北米の日系・アジア系女性たちは、タイコの持つ音響的・視覚的インパクトを保ちながらも、従来の「男らしさ」を喚起しない新しい演奏の様態を作りだそうとしている。タイコを打つという身体行為とそれに対する内外からの様々な意味づけの交渉の過程から、日系女性・アジア系女性としての自己イメージが創られ鮮明化していく。彼女たちが演奏するタイコ音楽の音響、振りや演奏形態



タイコを演奏する日系女性。

上の具体的な変化は、このような人種やジェンダーの軸が複合的に交差する場において行われると考えることができる。また、近年顕著になってきた日系以外のアジア系、ヨーロッパ系、およびセクシュアル・マイノリティの太鼓奏者の増加は、タイコ音楽と演奏者の関係の考察に、新たな軸を加えることになり、その関係はより複合的、重層的になっている。この共同研究では、類似する事例を世界各地から集め、それらを詳細に比較・検討することから、音楽とアイデンティティの関係についての考察を精緻化したい。

マイノリティの身体と音楽

第二に、音楽は身体を通してのみ生成されるというごく当たり前だが、マイノリティと音楽の研究において十分に考察されていない側面に注目したい。マイノリティにとって、音楽を生み出し、享受する身体はアイデンティティ形成のプロセスでどのように機能するのか。マイノリティの音楽実践の基底に、力の不均衡に基づく社会関係や被抑圧の歴史が存在するのであれば、身体はその記憶装置として機能するのか。マジョリティの音楽実践における身体と差異があるのか。

身体は社会的に構築され、「規制」と「抵抗」がしのぎを削る場である。そして、そのような拮抗はしばしばパフォーマンスを通して発現することが指摘されてきた。先にあげた日系女性の例に戻ると、タイコを打つ構えや振りは日系社会で期待される「閉じた身体」とは正反対に位置する「開かれた身体」であるがゆえに抵抗の力を持つ。家庭で「足を広げな」「大きな声を出すな」と言われ続けた日系女性たちが、

足を大きく開くタイコの構えや、身体を震わせ突き動かすようなタイコの響きに魅せられるのは、日系社会の規制に対する抵抗がタイコのパフォーマンスを通じて実践できるからである。

あるフィリピン系アメリカ人は、フィリピンの伝統舞踊を学ぶ過程で、いかに自己の身体が北米の支配的文化に同化されており、しかもそれについてほとんど無自覚だったことに気付いたと述懐する。このような身体の有り様には、体の重心の置き方(姿勢や歩き方など)のような日常生活全般に関わるものから、太鼓のバチの握り方などのように音楽の演奏に特化されたものまでが含まれる。このような自らの身体に主流文化が刻印されているという認識は、その

身体を変革することなしには支配的文化への抵抗は成就しないという考えを生み、それを実践する場として音楽が位置づけられる場合がある。そこで想定される、すでに失われてしまった「本来的な」身体、集団に固有の身体は本質主義的であると批判することも可能であるが、このような実践が、マイノリティがマジョリティとの関係における自己の位置を確認し、その上で自らを変えていく意識の変革の契機になっている点に注目したい。

この共同研究には、専門分野(人類学、音楽学、民族音楽学、パフォーマンス研究、身体論、セクシュアリティ研究など)や研究対象の異なる研究者に参加を呼びかけた。また、マイノリティ音楽の研究には、自らのマイノリティ性を出発点としている研究者の参加が不可欠であると私は考えているので、何人かのメンバーに参加を呼びかけた。多様なマイノリティ性をもつ研究者が対話を続けることができる場を提供することを念頭において会の運営に努めている。上述した留意点を共有しながらも、メンバーがそれぞれの視点・方法論を批判的に交差させながら議論を継続することによって、マイノリティの主体に軸足を置いた新しい視点と方法論を模索していきたい。

てらだ よしたか

民族文化研究部教授。民族音楽学専攻。インド、フィリピンを中心としたアジアの音楽文化および北米のアジア系音楽に興味を持つ。マイノリティと音楽に関する研究における映像の果たす役割についても関心があり、制作番組に、『大阪のエイサー:思いの交わる場』(2003年)、『怒:大阪浪速の太鼓集団』(2010年)などがある。